慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	公立中学校の英語授業における辞書引き学習導入実践 : 英語力と学習意欲の向上を同時に目指す試み
Sub Title	Practical application of dictionary lookup learning in English classes at public junior high schools : an attempt to improve English proficiency and motivation for learning at the same time
Author	武石, 裕子(Takeishi, Yuko)
Publisher	慶應義塾大学外国語教育研究センター
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾外国語教育研究 (Journal of foreign language education). Vol.19, (2022.) ,p.71- 98
JaLC DOI	
Abstract	This study is a report on the practice of "dictionary lookup learning" using English dictionaries in first-year students at a public junior high school in Niigata City, Japan. The basic approach was to engage in a dictionary search (Jishobiki) in the first 10 minutes of class and keep a record of it, and other approaches were taken according to the student's needs. The purpose of this study was to improve student's English language skills by helping activities according to "purpose, scene, and situation," which are necessary to develop "the ability to think, judge, and express" in terms of the three skills required in the Courses of Study. This study has demonstrated that using the first 10 minutes of class to engage in continuous dictionary study is one of the solutions to the greatest challenges of English language learning in junior high schools, namely, motivating students to learn English and improving their English proficiency. However, there were also some challenges to be overcome.
Notes	調査・実践報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12043414-20220000-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

公立中学校の英語授業における辞書引き学習導入実践

――英語力と学習意欲の向上を同時に目指す試み――

武　石　裕　子

Abstract

This study is a report on the practice of “dictionary lookup learning” using English dictionaries in first-year students at a public junior high school in Niigata City, Japan. The basic approach was to engage in a dictionary search (Jishobiki) in the first 10 minutes of class and keep a record of it, and other approaches were taken according to the student’s needs.

The purpose of this study was to improve student’s English language skills by helping activities according to “purpose, scene, and situation,” which are necessary to develop “the ability to think, judge, and express” in terms of the three skills required in the Courses of Study.

This study has demonstrated that using the first 10 minutes of class to engage in continuous dictionary study is one of the solutions to the greatest challenges of English language learning in junior high schools, namely, motivating students to learn English and improving their English proficiency. However, there were also some challenges to be overcome.

はじめに

どのような指導法を用いれば、生徒の英語力を高めることができるのだろうか。中学校英語科教員に採用されて以来、様々な指導法を試してきたが、この問いへの答えは見つかっていない。英語学習のゴールは、様々な国の人とのコミュニケーションをとることであるが、実際には定期テストや入試で高得点をとることになってしまっている。さらにそれさえも達成できず、中学校段階で英語学習が嫌いになり、諦めてしまう生徒も多い。

平成29年３月に告示された小学校学習指導要領が令和２年度から全面実施され、中学校には英語を「教科」として学んだ生徒が入学してくることとなった。それまで短いとはいえない経験年数を積んだ現職の中学校英語科教員の１人として、今後はどのような英語授業を展開でき

るのだろうかと期待と不安で新入生を待ち侘びていた。同じような気持ちは小学５、６年生で「外国語活動」が必修化され、「外国語活動」として英語に親しんだ生徒が入学してきた2011年以降も持っていた。初めて「外国語活動」を経験した新１年生を担当した時、ALTと笑顔で接する姿や、日常の挨拶や教室での指示などのクラスルームイングリッシュにもすんなりと対応している姿を見て、小学校での「外国語活動」の成果を感じた。小学校５、６年生からの「外国語活動」だけでも大きな変化があったのだから、「教科」として学んだ生徒はどれほどまでにコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を身に付けているのだろうかと彼らと出会う日を心待ちにしていた。

令和３年度に１年生に学級担任として、英語を「教科」として学んだ生徒を担当する機会を得た。担当学年として、４クラスのうち２クラスの英語の授業を受け持つことになった。likeやplayを多用する自己紹介とは違って、自分の意見や事実をどのように伝えることができるのだろうか、ALTや友達ともどれくらい積極的にコミュニケーションを取ろうとするのだろうかと期待を膨らませて授業の初日を迎えた。しかしそこで出会った新入生には、コミュニケーション活動は「成績に入るからしなくてはいけないもの」として捉え、「英語は嫌い、分からない、書けない、話すのは楽しいけれど書くのは難しい」などと否定的な思いをもつ生徒が多くいた。

これは英語が「外国語活動」から「教科」となったことで、数学や国語のように小学校から続いている教科と同じになったことを意味している。他教科のように小学校で得意・不得意が生まれ、生徒はその思いをもったまま中学校に入学するようになったということである。

生徒たちが一番苦手意識を感じているのは「書くこと」である。入学当初の授業の振り返りには、「なぜローマ字と同じではないのか」、「書き方が分からない」、「話せるけど書けない」といった書くことに関する問題や不安を伝えるコメントが多く見られる。小学校段階で既にコミュニケーションを図るための「知識・技能」の習得で躓いている生徒が多くいるにも関わらず、中学校でも言語活動、特に「話すこと」が中心に行われ、「話せるけど書けない」生徒は「とにかく丸暗記派」と「英語を諦める派」に分かれて行く。

中学校での英語教育の実施状況については、文部科学省が平成25年から各都道府県・市町村教育委員会及び全ての公立小学校、中学校、高等学校（義務教育学校、中等教育学校を含む）を対象に、都道府県・指定都市教育委員会を通して12月１日を基準日に「英語教育実施状況調査」を行なっている。この調査項目も「生徒の英語による言語活動の状況」が中心で、「令和３年度版の概要」[*1]では「生徒の英語力向上に向けた分析」を以下のように分析している。

○生徒の英語力向上には、相関分析や回帰分析の結果、中学校、高等学校のいずれにおいても**「生徒の英語による言語活動時間」「英語教師の英語力」**の２つの要素が影響を与えている。

○中学校では「パソコン等の活用」、高等学校では「CAN−Do リストの活用」「中高連携」なども影響。

○「教師の英語使用割合」が高いほど、「生徒の英語による言語活動時間」の割合も高くなる。→「英語力のある教師によるコミュニケーション重視の指導（あるいは文法とコミュニケーションの両者を統合した指導）」と「活発な英語による言語活動」が、英語の英語力の向上に必要。

この分析からは、教師と生徒が両方とも英語を使用した活動時間を増やすことで、英語力を向上させることができると読み取ることができる。英語学習は語学学習であり、EFL 環境（English as a Foreign Language）、つまり英語を母語としない日本人が英語を使わない環境で英語を学ぶ日本において、意図的に英語に触れる時間を作ることは英語力向上には欠かせない。そして「目的・場面・状況」を意識した言語活動を行うためには、適切な言語材料を身につけることが必要である。生徒が話したり書いたりする時に陥るジレンマである、「何と書いたら良いのか、どのように話したら良いのか分からない」、「これは英語でどのように言えば良いのか分からない」というような悩みを解消する活動が授業でも必要ではないかと考え、辞書引き学習を導入し実践研究を行った。

1．実践の背景と目的

本実践では学習指導要領で求められる３つの技能の観点から、「思考力・判断力・表現力」を養うために必要な「目的・場面・状況」に応じた言語活動を行うための基礎となる言語材料（知識・技能）を辞書引きで身につけることで、生徒の英語力の向上を目指すことを目的とした。また生徒にもたらされる影響や効果の１つとして、言語材料（知識・技能）の習得だけでなく、「学びに向かう力・人間性」に関わる英語学習に対する学習動機づけとどのように関わるのかもアンケートから見取ることも目的とした。こうした背景や目的について、本章で詳述していく。

1.1． 辞書引き学習

本実践の背景となるのは「辞書引き学習」である。「辞書引き学習」とは荻野ほか（2022）によれば、以下のように説明される。

> 任意の箇所から辞書を読み既知の単語を見つけ、通し番号を付した付箋紙にその単語を書き掲載ページに貼り付けていくことを手始めに、未知の単語についても同様に付箋紙を貼っていくものである。1990年代に深谷圭助により開発され、日本の小学校で広く知られるようになっている言語学習方略と言える。[*2]

さらに「辞書引き学習」には２つの特色があると深谷（2018）は述べている。

> この学習法の特色は二つある。一つは、辞書を引く際に、未知の語だけでなく、既知の語も辞書を引く対象の語として認めるということである。もう一つは、辞書を引いた際、見つけ出した語が掲載されている頁の余白に、通し番号を付し語を書き写した付箋紙を貼るということである。この学習法の実践により、児童の辞書を活用する意欲が高まり、辞書を活用する機会が増えたこと、そして、その結果として語彙が広がり、語彙の理解が深まることが明らかにされた。[*3]

生徒たちは小学校３年生で国語辞典の使い方を習っている。しかしそれは「分からない言葉があったときに調べる」という使い方であり、深谷が提案している使い方とは異なる。本実践における「辞書引き学習」とは、辞書を開いてその時に偶然出会った言葉を付箋に書き、その言葉の周りにもある言葉に注目し、語彙を広げていくという辞書を「読む」作業に、生徒たちが帯活動として取り組むというものである。

１.２. 学習意欲につながるもの

英語を母語とせず、日常的に英語に接する機会の少ない日本において英語力を向上させるためには、自ら英語に接する機会を作り継続して英語を学習していくことが不可欠である。そのためには英語を学習するための動機付けが必要である。学校現場で教員が提供できる動機付けのための機会と言えば ALT 授業や、海外の学校との交流などがある。しかしそれらは年間、あるいは中学校を卒業するまでの３年間を継続した取り組みではない限り、単発的な動機付けになってしまう。また ALT は授業の機会が限られていて、ようやく月に１時間の授業確保ができるような状況である。

このように制約がある ALT 授業や国際交流の機会以外にも、動機付けとなるものがあるのではないだろうか。例えば英語が得意だったり好きな生徒の中には、洋画を見ていたり洋楽を聞いていたりと自分から機会を作り、楽しみながら自然と英語に接している。辞書引きも辞書と付箋というツールさえ手元にあれば、教師などが取り組む時間や場所を特別に設定する必要はなく、好きな時間に自分のペースで取り組むことができる。

そこで、本実践では、生徒自身による辞書引き導入１ヶ月後、４ヶ月後、半年後、年度末である８ヶ月後でのルーブリック評価、JB レポートの記述、さらに９月と11月の定期テストと４件法によるアンケートを分析することで、生徒の学習意欲における変化を見取ることによって評価すべく、実践を進めていった。

2． 実践の内容

本実践の具体的な活動について説明する。関係資料などは文末に一括して提示する。

2.1． クラスの状況と事前準備

今回の実践の対象となったのは、公立中学校である新潟市立石山中学校１年生４クラスのうち１組と４組の英語授業である。令和３年度の入学生であるため、小学校６年生で教科としての英語を学習してきた生徒である。学校は新潟市の東区に位置し、１年生から３年生まで各４クラスと特別支援学級２クラスの中規模校である。生徒は落ち着いた学校生活を送っているが、市内の他地域と比べると経済的に苦しい家庭が多く、家庭学習の習慣が身についていない生徒が多い。入学後すぐに行った NRT（標準学力検査）の標準偏差は国語50.3、社会49.2、数学50.0、理科48.5、英語49.4という結果である。英語に関しては実践を行った２クラスの標準偏差は１組は48.2、４組は51.4である。

どちらのクラスともコミュニケーション活動には積極的に取り組み、分からないことや疑問に思ったことは質問するなど意欲的に学習しているが、じっくりと読んだり書いたりする活動は苦手である。特に１組は全体的に落ち着かなく、授業が開始時間に始められなかったり、授業中も生徒の興味が学習内容から逸れていってしまうことがよくある。両方のクラスとも月に１回の ALT 授業をとても楽しみにしていて、校内でも ALT に出会うとハイタッチをしたり話しかけたりと、積極的にコミュニケーションをとっている。クラス人数はそれぞれ29名である。

英和辞典は、個人所有もクラスに２、３名しかおらず、また学校側で揃えることもできなかったため、中部大学深谷科研[*4]の実践研究の一貫として提供（貸与）されることになり、『チャレンジ中学英和和英辞典第２版スマートスタイル』合計58冊を用意した。

２クラスとも５月31日から、週４時間の英語授業のうち２時間の帯活動で実施するということで準備を進めた。毎回の JB（辞書引き）日記とルーブリックは、研究プロジェクトから提供されたものを使用した。夏休み後の JB 日記は、４組は日付と調べた枚数を入力するとそれまでの合計枚数とグラフが出るようなスプレッドシートに変更したが、１組は紙媒体のまま使用した。４組のスプレッドシートも当初はお互いの学習状況を見て友達の姿から学んだり、良い刺激となることを期待して共有シートにしたが、友達のものを間違って消してしまう生徒や、友達のスプレッドシートに勝手に書き込む所謂「荒らし」をする生徒が出て、個人のものとした。そのようなこともあり、友達と学習成果を共有する機会として定期的に JB レポートを作成し、授業支援クラウドであるロイロノート[*5]の提出箱に提出させた。それを教師側から回答共有し、生徒がお互いの学習成果を見ることができるようにした。

2.2. 導入授業

２クラスとも導入授業を５月31日に行った。大半の生徒にとって初めて英語辞典に出会う時間だったので、英和辞典と和英辞典とはそれぞれどのようなものなのかという説明から行った。生徒は貸与とはいえ自分だけの辞書を手にし、とても喜んでいた。

○○○○○○中学校「辞書引き導入授業」指導略案

時	教師の活動・生徒の活動	指導上の留意点
導入 （10分）	１．辞書引き学習について生徒の関心を引き寄せる 教師：辞書引き学習に使用した辞書を見せながら、小学校で辞書引き学習を経験したかどうか質問する 生徒：経験者は質問に答える ２．辞書と付箋を配布 教師：辞書と付箋を配る 生徒：辞書と付箋を受け取り名前を書く ３．辞書引き学習の進め方について説明 教師：辞書引き学習の進め方について説明する 生徒：説明を聞く	・辞書引き学習経験者には「何年生の時に、どのくらいの期間、何枚貼付箋を貼ったか、感想」などを聞く。 ・貸与ではあるが、全員が同じ辞書を使うのでなくさないように名前を書かせる。 ・小学館「英語でも辞書引き！」の HP をモニターに映しながら説明する
展開① （10分）	４．小学館「英語でも辞書引き！」の HP に合わせて実際に付箋に１つ書く 教師：HP で「用意するもの」と「手順」に合わせて活動を進める 生徒：「用意するもの」に書かれているものを確認する。「手順」に合わせて付箋に今日調べようと思う枚数の通し番号を書き、辞書を広げて知っている言葉を見つけたら付箋に書き、言葉を書いた付箋を辞書の上の方に貼る	・分からない言葉があるから辞書を「引く」のではなく、パッと開いたページに知っている言葉があるか探すように強調する
展開② （10分）	５．個人作業 教師：生徒の様子を見ながら声をかける 生徒：辞書を開いて知っている単語を見つけたら付箋に書き込み、辞書に貼っていく	・やり方が分からない生徒と一緒に取り組む。進みが早い生徒にはどんどん枚数を増やすように声をかける
展開③ （10分）	６．ペアワークをする 教師：うまく進まないペアと一緒にクイズを出す 生徒：今日調べた言葉から５問クイズを出題する	・ペアを変えて２回行う ・英語で出題して日本語で答えてもらっても、その逆でも良い
まとめ （10分）	７．振り返りを記入する 教師：今後の学習の進め方と振り返りの書き方について説明する 生徒：説明を聞いて振り返りを記入する	・次の時間からは週２回、授業の最初で行うことを伝える ・振り返り用紙を回収する

この時間で、辞書引き学習が小学校の時に行っていた「分からない言葉に出会った時に探す」という辞書の使い方とは全く異なり、「パッと開いたページに知っている言葉があったらそれを付箋に書く、次のその言葉の周りに他に知っている言葉はないかというように辞書を読んでいく」ということを強調した。生徒の中に「辞書は分からない言葉があった時に探すもの」という意識が強く、ここを強調しないと辞書を引こうとすらしない生徒も出てくる。そのような生徒には、特に「適当に辞書を開いてごらん」と声をかける。そして生徒が開いたページを一緒に見て「この中に知っている言葉はあるかな」と声をかけ、「あっ、ある」と言うので、それを付箋に書いてごらん」と言い、まず付箋を1枚書くことができる。そして次に「今の言葉の周りに知っている言葉はあるかな」と声をかけ、あれば同じように付箋に記入させ、なければまた「適当にページを開いてごらん」と声をかける。その日の言葉との偶然の出会いからどこまで知っている言葉が広がっていくか、また自分で思っていたより自分が英語を知っていたことに気づいたり、中には接頭語や接尾語など英単語の特徴に気づいたりと、学習の広がり方は無限である。

ペアワークではペアでクイズを出しあった。日本語で出題して英語で答えてもらっても、英語で出題して日本語で答えてもらっても良い、さらに出題する言葉も簡単なものでも、絶対に当たらないような難しいものでも良いのでお互いに5問ずつ出題することにした。クイズ活動を通して相手がどのような言葉に興味をもったのかを知ることで、次の時間の辞書引き学習に繋がることをねらったものである。またワークシートに学習の成果を記録するだけでなく、ペアでクイズを出し合う活動自体も学習意欲に繋がっていくと考える。

学習の振り返りとして、JB日記にその日調べた枚数とどんな言葉に出会ったか、どんなことを学んだかを80〜100字程度で記録する。記録用紙はその時間の終わりに回収し、次回までに点検をしてコメントを返した。

導入授業後は、週に4時間ある英語の授業のうち、2時間の帯活動で辞書引き学習を行った。進め方は7分間の個人作業、2分間のペアワーク、1分間の振り返り記入である。1週間のスケジュールでは、辞書引きとその他の活動を交互に行った。辞書引き以外の帯活動には、プレゼンテーションプラットフォームである mentimeter[*6] を使った前時までの復習クイズや、ペアでのスモールトークを行った。

2.3. まとめの活動

まとめの活動として、辞書引き導入1ヶ月後、4ヶ月後、半年後、年度末である8ヶ月後でルーブリック評価と個人作業であるJBレポートの記述、JBトーナメントと称したグループ活動を行った。

JBレポートはJB日記とは別に、次のような内容を書かせるものである。「① 今まで調べた

合計枚数 ② 今まで見つけた大発見単語 BEST 3 ③ 分かったこと、気がついたこと ④ これからの目標」をロイロノートで作成し、提出箱に提出させた。全員が提出した後に回答共有して友達の進捗状況や学習状況について見ることで、学習動機づけに繋がっていった。

JB トーナメントは、出題される問題について、辞書を使って班で協力して取り組むものである。班のメンバーが見つけた単語を班長に見せて班長が書いたり、「o, l, y, m, p, i, c」のように伝えて班長が書いたりと班によって回答のまとめ方は様々であった。回答はロイロノートに書き、制限時間が来たら提出箱に提出する。ロイロノートの提出箱には提出時間が出るので、一番早く提出した班にはプラス 1 ポイントとした。問題の例としては、「オリンピックに関する単語を 5 分間でできるだけたくさん書こう」、「p から始まる一番長い英語の言葉を 3 分間で探そう」、「5 分でしりとりしよう」などである。生徒の中には「オリンピックに関する単語を 5 分間でできるだけたくさん書こう」という問題を見て、iPad で「オリンピック」と入力して検索し始めた生徒もいた。しかし「オリンピック」というキーワードでは英単語が出てこなくて、検索方法を考えているうちに時間が経過し、さらに班の他のメンバーは辞書でどんどん単語を見つけている様子を見て、慌てて iPad をやめて辞書を使い始めた。

生徒たちにこの JB トーナメントは大人気で、「班活動ではなく個人戦にしてほしい」、「もっと時間を増やしてほしい」などリクエストもたくさん出てきた。終わった後の振り返りでは「おもしろかった」に加え、「こんなに頭を使ったのは久しぶりだった」という予期しなかった感想もあった。さらにこの活動には、普段の辞書引き学習にはあまり乗り気ではない生徒も楽しそうに参加していた。この活動も辞書引き学習そのものと英語学習、また時事的な問題を入れることによって国際理解についても学習の動機づけに関与することができるのではないかと考える。

唯一の難点があるとすれば、今回使用している『チャレンジ中学英和和英辞典第 2 版スマートスタイル』の中に、「食べ物に関する言葉」や「動物に関する言葉」などをまとめたコーナーがあることである。これは学習者にとっては非常に便利であるが、クイズの問題を作る側からしたら、まとめのコーナーがないものを探して考えて出題しなくてはいけないということである。その分、出題する側も辞書をじっくりと読むことができ、生徒がクイズの答えを探しながら、どのような言葉にどのように出会っていくかを想像することもできる。教師自身も辞書を読む経験を、この JB トーナメントの問題づくりですることができるとも言える。

○○○○○○中学校「JBトーナメント授業」指導略案

時	教師の活動・生徒の活動	指導上の留意点
導入 （4分）	1．準備と説明 教師：班の形を作り、解答者を決めるように指示する やり方を説明する 生徒：班になり、解答者を決める 説明を聞く	・机の上に辞書、iPad、筆記用具を準備させる ・スクリーンに説明を映す ・2回目以降は、生徒の様子を見て説明を省略可能
展開 （40分）	2．Missionに取り組む 教師：Missionをモニターに映す 制限時間を伝え、タイマーで測る 制限時間がきたらロイロノートの提出箱に提出させる 提出物に記録される提出時間を見て、一番早い生徒（班）に1ポイント加点する 生徒と解答を確認する 生徒：Missionに取り組む 制限時間がきたらロイロノートの提出箱に提出する 解答を確認する	・50分授業ではMissionは4つでちょうど良いが、生徒の様子を見て数を変える ・Missionを個人作業とグループ活動の両方を入れることも可能
まとめ （6分）	3．振り返りを記入する 教師：順位を確認し、振り返りを書かせる 生徒：振り返りを記入する	

表1　生徒のJBレポートの記述例（導入半年後の12月）

①今まで調べた合計枚数	②今まで見つけた大発見単語 BEST 3	③分かったこと、気がついたこと	④これからの目標
558枚	1．sure 副詞だと確かに、といういつも使ってる意味だけど、形容詞になると確信してと使えるから。 2．paper a piece of paperで紙一枚という意味になるから 3．made 「作る」の過去形しから知らなかったけど、be made of~ で…製のという意味になることが分かった	普段使っている単語もbeを付け足したり、形容詞、動詞、副詞…など形を変えれば意味が全く変わることが分かった。	次回は、形を変えての意味まで理解できるようにしたい。そして、知っている単語をたくさん見つけて、英語をより使えるようにしたいです。
172枚	1位　question qから始まる単語が少なかったから 2位　each each otherはよく使っていたけどeach単体はあんま使ったことなかったから 3位　learn learnは習うでstudyが勉強するという意味だった。使い分けるのむずそう。	辞書があればどこに行っても怖くない！	200枚 → 300枚 → 500枚と増やす！
38枚	1位　cockroach 2位　toilet 3位　paper おもしろいから	いろんな言葉があると気づいた	50枚いくこと

167枚	１位　live 生きるという意味とコンサートや生放送のライブという２つの意味があった ２位　rainbow rainbow が虹という単語のことを初めて知ったから ３位　work 働くという意味と仕事という２つの意味があることを知ったから	自分が知っていることと違うことが発見できるし、新しい言葉も知れるから、辞書はとても便利だと思います。たくさん調べると将来にも役立つのかな～と思います！	冬休み中もたくさん調べて、500枚まで調べたいです！

表２　JB トーナメントの回答例（年度末の２月）

問　題	回　答　例
オリンピックに関する単語を５分間でできるだけたくさん書こう！	Olympic, Paralympics, sports, medal, surfing, tennis, basketball, baseball, soccer, track and field, skateboard, table tennis, Judo, badminton, medal, gold, silver
p から始まる一番長い単語を３分間で探して書こう！	pronunciation, philosophical, physical education, professional
５分間でしりとりしよう！	quick, kids, see, each, have, everything, good, day, your, right, they, you, up, please, even, now, with, him, more, every, year, right, then, national, lyrics, should, dye, effectively, yak, keep, put, type, enough, how, well, if, for, rain, nine, error, run, nice, eye, even

３．結果の分析

本章では、定期的に行った生徒自身によるルーブリック評価、そして９月と11月の定期テストと４件法によるアンケート分析、さらに辞書引き学習に意欲的に取り組んだ生徒へのインタビューを分析することで、辞書引き学習による英語力と学習意欲における変化を検討する。

３.１．時期別のルーブリック分析

まず、ルーブリックの結果について、時期によってどのような変化を示したのかを分析していく。ルーブリックは「A、B＋、B、C」の評価基準で行われ、それぞれを「５点、４点、３点、２点」に換算して数値化した。辞書引き導入１ヶ月後の７月、４ヶ月後の10月、半年後の12月、年度末である８ヶ月後の２月で実施したので、それぞれの回について生徒の回答の平均を出し（表３参照）、表３の数字から平均値の変化が分かるようにグラフを作成した（図１参照）。

表３　時期別の平均値

	知識・技能 ①辞書の利用法：辞書を読むJBモデルの技能と英語に関する理解	②辞書の利用法：辞書を引くことに関する技能と知識・理解	**思考・判断・表現** ③辞書の多領域での応用：辞書の応用	**学びに向かう力・人間性（1）** ④辞書利用に向き合う姿勢：辞書利用の姿勢	**学びに向かう力・人間性（2）** ⑤日常の学習における辞書利用：日々の学習における辞書
７月	4.34	4.38	4.10	4.14	4.10
10月	4.46	4.42	4.06	4.19	4.23
12月	4.23	4.29	4.17	4.03	4.11
２月	4.27	4.39	4.20	4.18	4.19

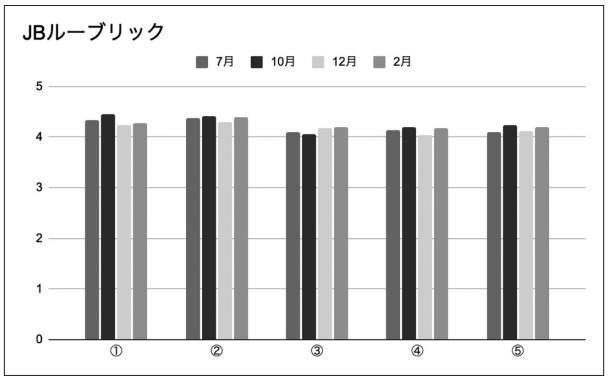


図１　時期別の平均値

全ての項目で、年間を通して大きな変化は見られなかった。導入１ヶ月後の７月から高い数値を示していたのでその後は下がっていくと予想したが、予想に反して全ての項目で高い数値を維持していた。

内容別に見ていくと「① 辞書の利用法：辞書を読むJBモデルの技能と英語に関する理解」と「② 辞書の利用法：辞書を引くことに関する技能と知識・理解」という「知識・技能」に関する項目では、７月の高い数値を２月でも維持できたと読み取ることができ、「辞書の利用に関する知識・技能」を生徒は導入１ヶ月で身につけることができ、そのまま身につけた「知識・技能」を使い続けたと考えられる。次に「思考・判断・表現」に関する③の質問では、10月に一度下がり、その後は12月、２月と高くなっているので、辞書引きを続けることによって、辞書で出会った言葉を応用したりと辞書を読む活動から、それらを用いた言葉を自分で使う段階に進んでいくと考えられる。④と⑤の「学びに向かう力・人間性」の項目では、５点となるAが④では「自らの学校生活の中だけでなく、家庭においても分からないこ

とを自分で見つけて積極的に利用できる」、⑤ では「自ら校外・家庭でも自然と日常の学習で積極的に探究的な活動ができる」であり、授業中からさらに一歩進んで自律的な学習者であることを目指すものである。学校現場では持ち帰り荷物の軽量化、ICT の活用が盛んに言われ、重い辞書を持ち帰らせることを良しとしない風潮である。そのためか、一度持ち帰るとなかなか学校に持ってこない生徒も多い。辞書を学校用に一冊、家庭用に一冊、もしくは家庭では iPad のデジタル辞書などと、複数の辞書を使用するという視点も今後もたせたい。

3.2. 時期別のアンケート分析

辞書引き学習に関するアンケートを、導入１ヶ月後の７月と年度末の２月に行った。アンケート項目は「d1 :「辞書引き学習」は楽しい」、「d2 :「辞書引き学習」で知っている単語量が増えてきている」、「d3 :「辞書引き学習」を始めてから、授業中に自分で辞書を使って調べることがある」、「d4 :「辞書引き学習」を始めてから、家庭学習でも辞書を使うことがある」と「d5 :授業中に辞書が手元にあると安心する」の５項目で、生徒は「とても当てはまる」、「少し当てはまる」、「あまり当てはまらない」、「全く当てはまらない」の４件法で回答した。２回の平均は図２のようになった。

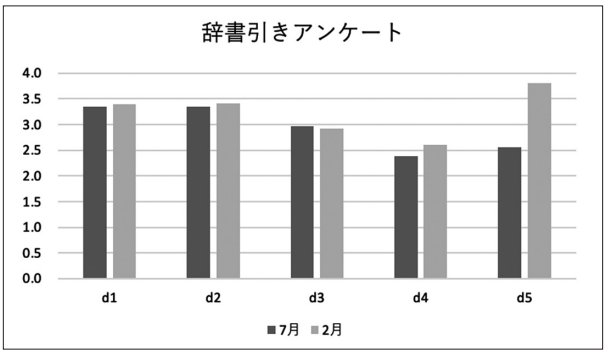


図２　辞書引きアンケート

d3 以外の全ての項目で１回目より２回目の方が、数値が高くなった。特に「d5 :授業中に辞書が手元にあると安心する」の変化が大きく、自分の辞書にどんどん付箋の枚数が増えてくることで学習の成果が目に見え、それが安心感につながっていくのではないかと考える。唯一数値が下がった d3 は授業中に辞書を使うかどうかの項目であるので、辞書引きで目指す「辞書を読む」活動の他にも、授業中に従来の使い方である「辞書で調べる」活動も意図的に仕組む必要があると言える。特に iPad が導入されて以来、生徒は英作文をする時には Google 翻訳などの機械翻訳に頼ってしまい、自分で考えたり探したりする労力を厭うようになってい

る。機械翻訳を使いこなすことも大切なスキルの１つだが、そこで出てきた英文が本当に自分が伝えたいことであるかを判断する英語力をつけることと両立させていかなくてはいけない。

３.３. 定期テストとアンケートの関連分析

６月、９月、11月、２月の年に４回行われる定期テストの結果と辞書引きアンケートの結果をもとに、辞書引き学習がペーパーテストで測ることができる英語力の向上に効果をもたらすかどうか検証する。入学して１ヶ月半の６月に行う１回目の定期テストは、小学校の復習問題がほとんどである。平均点も通常のテストは60点前後になるように作成するが、このテストだけは平均点が80点台後半になるように作成されることから、今回の分析には用いない。９月に行われる２回目のテストから、中学校入学以降学習した範囲で、４技能を「知識・技能」と「思考・判断・表現」において測るテストになる。

まず、７月の第１回目、辞書引き学習を始めて１ヶ月が経過してから取ったアンケートの項目の中で、辞書引き学習の「楽しさ」と９月と11月の定期テストの点数の関係を見ていく。すると、４件法で肯定的な回答をした生徒の方が、全体的にテストの点数が高かった。特に９月の定期テストでは「読むこと」の「知識・技能」以外、11月の定期テストでは「書くこと」の「知識・技能」以外で最も平均点が高かった。７月のアンケートで辞書引きを楽しいと回答した多くの生徒において、９月と11月の定期テストで点数が上がることが予想されるのではないかと考える。

９月の定期テストとの分析では（表４、図３）、「知識・技能」の「書くこと」が他と比べて最も差が大きかった。このことから「辞書引き」は楽しみながら語彙を増やし、それが「書くこと」の「知識・技能」につながっているのではないかと推測される。また、「思考・判断・表現」でも「書くこと」が他の２項目と比べて差が大きかったので、辞書引きで単なる語彙だけでなく、説明を読んだりすることで「書くこと」の表現力も身につくのではないかと考える。しかし「読むこと」の「知識・技能」では、「全くそう思わない」と否定的な回答をした生徒の方が高くなっているので、点数は取っていても辞書引きに興味を示さない生徒がいることも分かる。11月のテストとの分析でも（表５、図４）、９月と同様に、「知識・技能」の「書くこと」の項目で最も大きな差が見られた。ここでも「全くそう思わない」と回答した生徒が高い点数を取っている。

表４　９月の定期テストと「楽しさ」アンケート結果

９月	知識・技能			思考・判断・表現			合計
	聞く14	書く29	読む16	聞く６	書く24	読む11	100
4	10.6	12.3	10.2	4.5	9.6	7.0	54.2
3	10.6	8.0	9.2	4.5	7.7	6.0	45.9
2	9.3	6.5	8.9	4.0	5.9	5.9	40.5
1	10.2	10.6	10.3	4.4	8.4	6.8	50.6

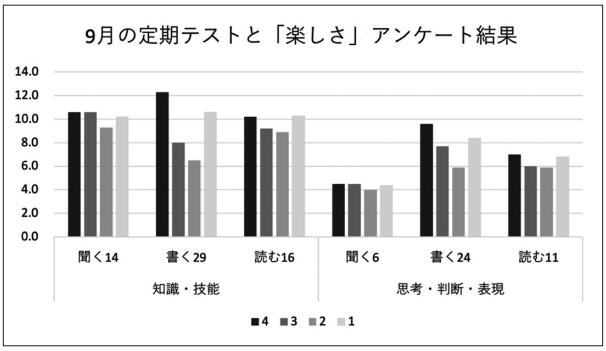


図３　９月の定期テストと「楽しさ」アンケート結果

表５　11月の定期テストと「楽しさ」アンケート結果

11月	知識・技能			思考・判断・表現			合計
	聞く12	書く32	読む14	聞く12	書く16	読む14	100
4	9.1	18.6	10.4	7.2	7.9	11.4	64.7
3	7.3	15.9	8.8	7.0	6.2	10.5	55.8
2	8.0	14.6	7.7	5.9	4.2	8.5	48.9
1	8.3	19.6	9.0	6.3	6.6	9.4	59.1

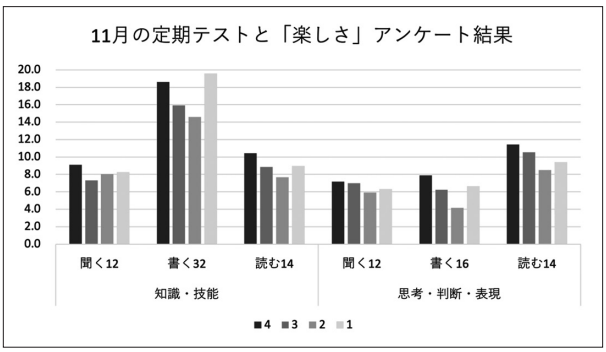


図４　11月の定期テストと「楽しさ」アンケート結果

これ以降順番に、７月のそれぞれのアンケート項目と９月の11月の定期テストの点数を分析していく。アンケート項目２つ目の「辞書引き学習で知っている単語量が増えてきている」と定期テストの点数には、９月（表６、図５）では関連は見られなかったが、11月（表７、図６）では大きな差はないものの、「思考・判断・表現」の「聞くこと」と「書くこと」では肯定的な回答をした生徒の平均点が高くなっている。これは辞書引きでは語彙力などの基礎的な力だけでなく、継続して辞書を読んだりクイズを出し合ったりすることで、応用的な力も高めるこ

とができる可能性も示唆していると考える。

表６　９月の定期テストと「単語量」アンケート結果

９月	知識・技能			思考・判断・表現			合計
	聞く14	書く29	読む16	聞く６	書く24	読む11	100
4	10.5	11.2	9.6	4.5	8.5	6.7	51.1
3	10.6	11.0	9.9	4.5	9.2	6.7	51.9
2	10.5	11.3	10.0	4.3	9.6	7.0	52.8
1	10.5	10.8	10.1	4.5	9.0	6.6	51.4

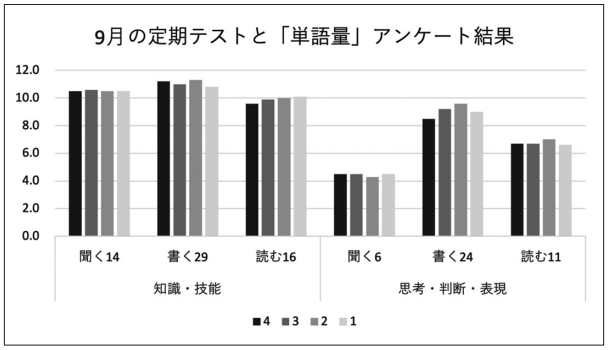


図５　９月の定期テストと「単語量」アンケート結果

表７　11月の定期テストと「単語量」アンケート結果

11月	知識・技能			思考・判断・表現			合計
	聞く12	書く32	読む14	聞く12	書く16	読む14	100
4	8.5	18.3	10.0	7.4	7.5	11.2	51.1
3	8.3	17.9	10.1	6.8	7.1	11.3	51.9
2	8.7	18.1	9.7	6.7	7.0	11.1	52.8
1	8.5	18.1	9.7	6.6	7.2	11.1	51.4

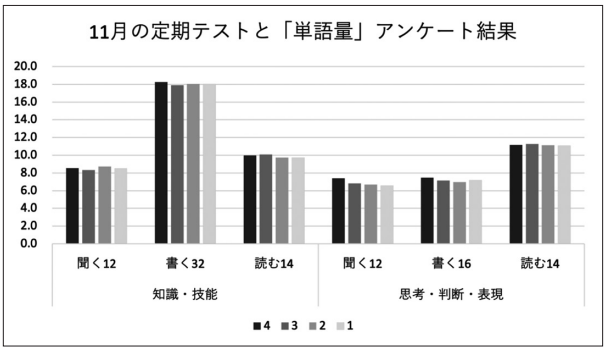


図６　11月の定期テストと「単語量」アンケート結果

アンケート項目３つ目の「辞書引き学習を始めてから、授業中に自分で辞書で調べることがある」と定期テストの点数には、９月（表８、図７）では「知識・技能」の「書くこと」と「思考・判断・表現」の「書くこと」で、11月（表９、図８）では「知識・技能」の「聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の全てと「思考・判断・表現」では「書くこと」で肯定的な回答をした生徒ほど平均点が高かった。辞書引きは「読む」活動ではあるが、生徒が必要に応じて「調べる」ことも英語力を高めていく。生徒が自ら「調べよう」と思うような授業づくりをすることで、辞書を用いてさらに生徒の力を高めることができると推測する。しかしながら11月（表９、図８）では、「思考・判断・表現」の「読む」ことで、肯定的な回答をした生徒の平均点が一番低くなってしまった。

授業を振り返ると、書くために辞書を用いることができる授業はあったが、読むために辞書を用いるような機会は提供していなかった。同じ「調べる」でも書くために調べるのか、読むために調べるのかという目的によって、生徒の調べ方も見つけた単語の活用方法も変わってくる。書くために調べるときには品詞や用法を確認することが必要であり、読むためであれば日本語でどのような意味になるかを確認することが必要である。授業中の読む活動は教科書の本文が中心で、教科書にはそこで用いられている新出単語の意味はすべて書かれているので、生徒は自分で調べる必要はない。調べるとしたら既習単語になるので、これも教科書の後ろにすべて載っている。教科書の本文を学習した後に、練習として本文に似たような文を読む練習をするが、ここでも未習の単語には意味を付けているし、周りから推測することもできる。この時に未習単語を周りから推測しても良いし、辞書で調べても良いとすると、生徒は読むために辞書を引く経験をすることもできる。本来の「辞書引き学習」とは異なるが、この経験を通して辞書の便利さを体験することができる。さらに自分で辞書を用いて調べながら読み込んでいくことに慣れれば、少し難易度が高くてもさらに読んでみたいと読むことへの意欲を高めることができるのではないかと考える。

表８　９月の定期テストと「授業中の辞書活用」アンケート結果

９月	知識・技能			思考・判断・表現			合計
	聞く14	書く29	読む16	聞く 6	書く24	読む11	100
4	10.3	13.4	9.9	4.4	10.3	7.0	55.3
3	11.0	11.6	10.0	4.5	8.8	7.4	53.3
2	11.0	10.7	10.3	4.7	9.5	7.4	53.6
1	10.3	10.0	10.1	4.5	8.4	6.2	49.6

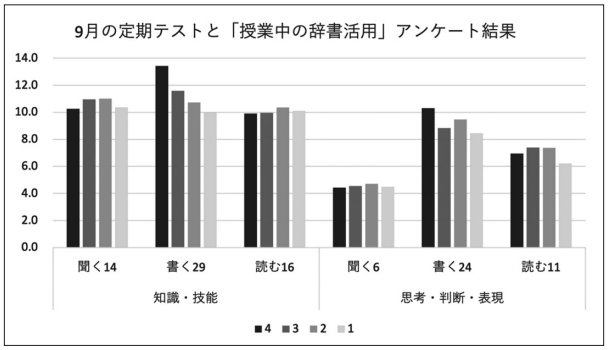


図７　９月の定期テストと「授業中の辞書活用」アンケート結果

表９　11月の定期テストと「授業中の辞書活用」アンケート結果

11月	知識・技能			思考・判断・表現			合計
	聞く12	書く32	読む14	聞く12	書く16	読む14	100
4	9.0	19.2	10.5	7.0	8.4	10.8	64.8
3	8.3	17.6	10.4	6.7	7.6	11.5	62.0
2	8.8	17.9	9.7	6.9	7.4	11.2	61.8
1	8.5	18.6	9.0	7.1	6.7	11.0	60.8

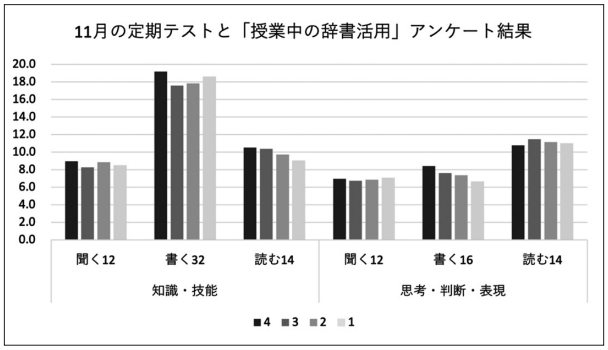


図８　11月の定期テストと「授業中の辞書活用」アンケート結果

アンケート項目４つ目の「辞書引き学習を始めてから、家庭学習でも辞書を使うことがある」と定期テストの点数には、９月（表10、図９）では全ての領域で、11月（表11、図10）では「知識・技能」の「書くこと」で「肯定的な回答をした生徒ほど平均点が高くなっていた。家庭学習の時間が定期テストの点数に関係していることは言うまでもないが、家庭学習でさらに辞書を活用することでより英語力を高めることができるとこの結果から考えられる。９月と11月のアンケート結果に大きな違いが見られたため、肯定的な回答をした生徒がどのように辞書を家庭学習で活用したのか、自分で辞書引きを進めたのか、それとも分からないことを調べるために辞書を使ったのか、活用方法と点数の関連も今後は検証していきたい。

表10　９月の定期テストと「家庭学習での辞書使用」アンケート結果

９月	知識・技能			思考・判断・表現			合計
	聞く14	書く29	読む16	聞く６	書く24	読む11	100
4	11.3	14.5	9.9	4.4	10.3	7.0	60.6
3	9.1	7.9	10.0	4.5	8.8	7.4	39.7
2	11.1	10.7	10.3	4.7	9.5	7.4	54.3
1	10.4	10.0	10.1	4.5	8.4	6.2	46.7

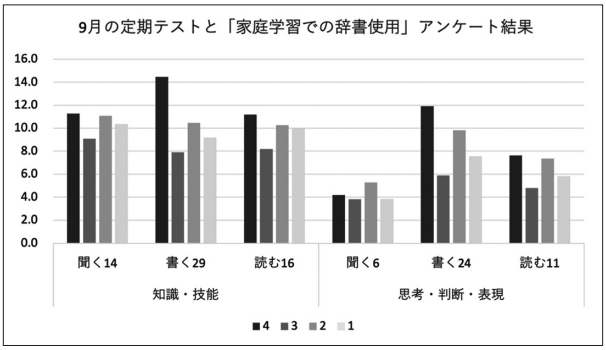


図９　９月の定期テストと「家庭学習での辞書使用」アンケート結果

表11　11月の定期テストと「家庭学習での辞書使用」アンケート結果

11月	知識・技能			思考・判断・表現			合計
	聞く12	書く32	読む14	聞く12	書く16	読む14	100
4	9.1	20.0	10.4	6.9	7.7	11.5	60.6
3	8.4	17.4	9.0	6.8	7.3	9.7	39.7
2	9.4	18.4	10.6	7.5	8.4	11.6	54.3
1	7.6	17.8	9.2	6.7	6.3	11.2	46.7

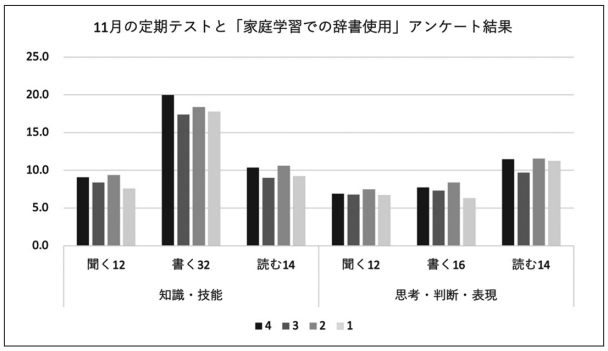


図10　11月の定期テストと「家庭学習での辞書使用」アンケート結果

アンケート項目５つ目の「授業中に辞書が手元にあると安心する」と定期テストの点数では、９月（表12、図11）では「知識・技能」と「思考・判断・表現」の「書く」で最も肯定的な回答をした生徒と、最も否定的な回答をした生徒の差が大きいことが興味深い。点数で見ると他の肯定的な回答とやや否定的な回答をした生徒に比べ、「知識・技能」では平均点が最も高くなっているが、「思考・判断・表現」では反対に最も低くなっている。辞書引きを始めて間もない生徒にとって、すでに辞書はパッと見て意味やスペルを確認できる安心できるものであっても、それを使って文章を書くまでには至っていないことが考えられる。11月（表13、図12）では「思考・判断・表現」の「聞くこと」、「書くこと」で最も肯定的な回答をした生徒の平均点が最も高くなっていた。辞書引きを始めた当初は、付箋が増えていくことが「意味や用法をすぐに確認することができる」という「知識・技能」に直結する安心感に繋がり、そこから単なる意味や用法の確認ではない、調べたことをどのように活用していくのかという英語力の向上に繋がっていくのではないかと考える。

表12　９月の定期テストと「辞書が手元にある安心感」アンケート結果

９月	知識・技能			思考・判断・表現			合計
	聞く14	書く29	読む16	聞く６	書く24	読む11	100
4	10.5	13.2	10.1	4.4	9.2	6.6	54.0
3	10.1	10.8	9.7	4.3	9.9	7.1	51.7
2	11.0	12.6	10.8	4.8	10.1	7.1	56.3
1	9.8	5.5	8.4	4.3	4.1	4.9	38.8

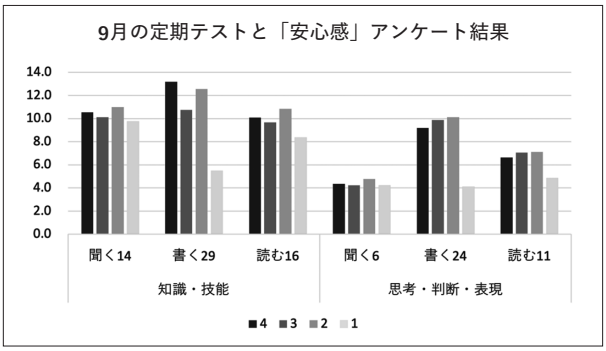


図11　９月の定期テストと「安心感」アンケート結果

表13　11月の定期テストと「辞書が手元にある安心感」アンケート結果

11月	知識・技能			思考・判断・表現			合計
	聞く12	書く32	読む14	聞く12	書く16	読む14	100
4	9.1	19.4	10.5	8.3	8.4	11.2	66.7
3	8.9	17.4	9.1	6.3	6.7	10.6	59.0
2	8.7	20.2	11.1	7.3	8.5	12.0	67.5
1	7.3	13.3	6.9	5.9	4.5	8.9	46.6

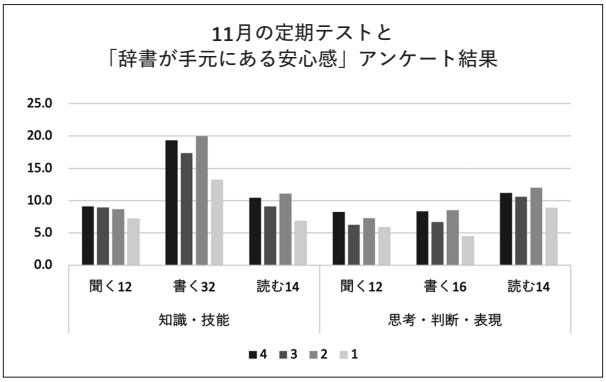


図12　11月の定期テストと「辞書が手元にある安心感」アンケート結果

最後に２月の定期テストとアンケートの全ての項目（表14 、図13）について分析する。

表14　２月の定期テストとアンケート結果

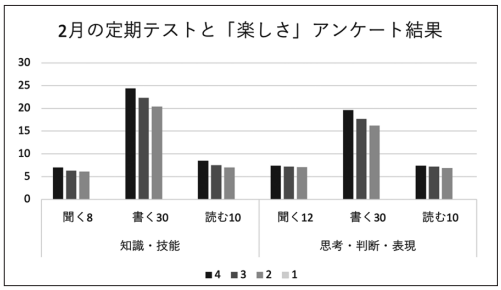
楽しさ	知識・技能			思考・判断・表現			合計
	聞く８	書く30	読む10	聞く12	書く30	読む10	100
4	7.0	24.4	8.5	7.4	19.6	7.4	74.3
3	6.3	22.3	7.5	7.2	17.7	7.2	68.2
2	6.1	20.4	7.0	7.1	16.2	6.9	63.7
1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

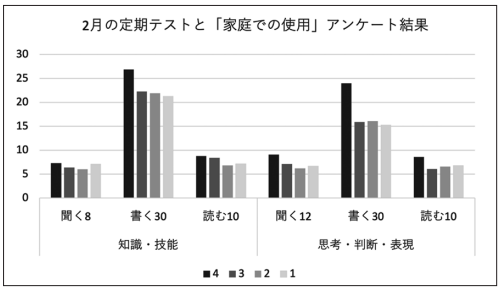
単語量	知識・技能			思考・判断・表現			合計
	聞く８	書く30	読む10	聞く12	書く30	読む10	100
4	7.4	24.8	8.4	7.4	20.6	8.0	76.6
3	6.1	21.8	7.5	7.3	16.5	6.5	65.6
2	5.7	20.5	7.3	7.1	15.3	6.2	62.0
1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

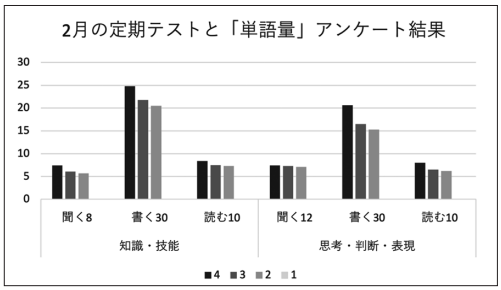
授業中の使用	知識・技能			思考・判断・表現			合計
	聞く８	書く30	読む10	聞く12	書く30	読む10	100
4	7.3	25.7	8.5	8.3	21.7	7.9	79.4
3	6.5	22.4	7.6	7.0	17.6	6.8	67.8
2	5.8	19.4	7.1	7.0	14.8	6.6	60.8
1	0.0	10.0	3.0	4.0	10.0	5.0	36.0

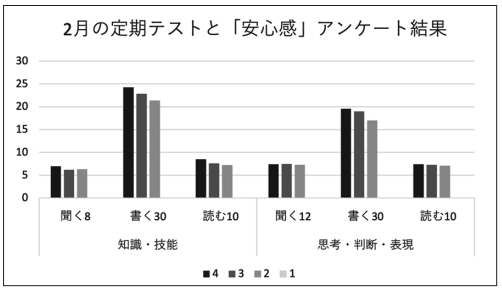
家庭での使用	知識・技能			思考・判断・表現			合計
	聞く８	書く30	読む10	聞く12	書く30	読む10	100
4	7.3	26.9	8.8	9.1	24.0	8.6	84.7
3	6.4	22.3	8.4	7.1	15.9	6.1	66.3
2	6.0	21.9	6.8	6.2	16.1	6.6	63.6
1	7.1	21.3	7.2	6.7	15.3	6.8	64.5

安心感	知識・技能			思考・判断・表現			合計
	聞く８	書く30	読む10	聞く12	書く30	読む10	100
4	7.0	24.3	8.5	7.4	19.6	7.4	74.3
3	6.2	22.9	7.6	7.5	19.0	7.3	70.5
2	6.3	21.4	7.2	7.3	17.0	7.1	66.2
1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0









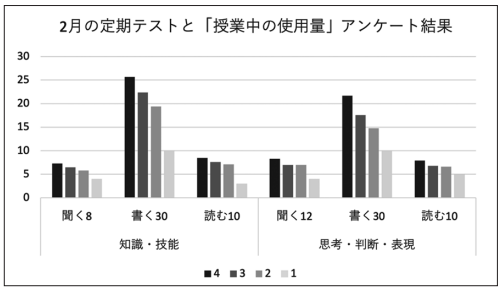


図13　２月の定期テストとアンケート結果

全ての領域で肯定的な回答をした生徒の平均点が一番高くなっていた。９月、11月の定期テストではアンケートに肯定的な回答をしていても平均点が低い領域もあったので、やはり辞書引き学習を継続していくことで、英語力も高めることできると考えられる。６月から２月までの８ヶ月間、長期休暇も入ったが週２回の辞書引き活動を継続してきたことで、生徒の英語力も高めることができたと考える。この結果は、辞書引き学習の大きな学習動機づけになる。公立中学校に通う生徒のほとんどが中学校卒業後の進学のため、高校受験をする。これは中学校３年間の学習面、生活面でのもっとも大きな学習動機づけ、生活面での意欲づけになっていると言っても過言ではない。今回実践した生徒たちは、社会や理科で用語を覚えるなど基本的な反復学習を苦手としていて、それに伴って英語の単語や文を繰り返し書くことも好きではない。「知っている単語を探す、辞書を読む」という辞書引き学習で、意図しないままに同じような言葉に何度も触れていくうちに語彙力も書く力も高まるとするならば、むしろ辞書引き学

習が受験を控える中学生にも歓迎される学習方法ではないだろうか。

3.4. 抽出生徒の JB 日記分析

アンケートを分析していく中で、興味深い生徒を見つけた。その生徒は、７月と２月のアンケートで最も大きな変化を見せていた。定期テストでも毎回安定した高い点を取り、授業でのコミュニケーション活動にも熱心に取り組む生徒である。そのため、７月のアンケートの結果をみた時に辞書引き学習に対して否定的な捉えをしていたことに驚いた。記録のある JB 日記の記述と終了後のインタビュー動画を分析することで、どのような心境の変化や学びがあったのかを分析する。

まずアンケートを分析すると（図14)、７月のアンケートでは「辞書引き活学習は楽しい」、「辞書引き学習で知っている単語が増えてきている」では「まったくそう思わない」と回答し、「辞書引き学習を始めてから、授業中に自分で辞書を調べることがある」と「辞書引き学習を始めてから、家庭学習でも辞書を使うことがある」では「あまり当てはまらない」と回答し、「授業中に辞書が手元にあると安心する」では「少し当てはまる」と回答していた。それが11月のアンケートでは、「辞書引き学習を始めてから、家庭学習でも辞書を使うことがある」以外の全ての項目で、「とても当てはまる」と回答していた。

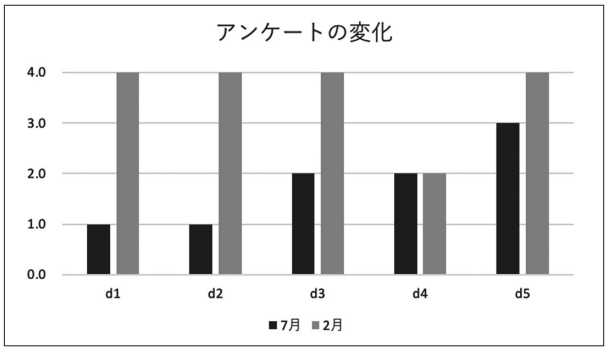


図14　アンケートの変化

JB 日記で付箋の枚数を分析すると、導入授業を行った５月31日から最後の３月７日まで、調べた付箋の合計枚数は841枚で、毎回調べた枚数は少ない日で５枚、多い日で28枚調べていた。次に JB 日記に書かれた自由記述をまとまりごとに分析していく（表15)。

まず内容ごとに分類すると、派生に関することが５回、文法に関することが10回、書き方に関することが３回、発音に関することが１回、似た意味をもつ単語については７回、他教科との関連は２回、１つの単語の複数の意味について１回、ある言葉に注目して書かれていたも

のは６回、教科書との関連について書かれていたものが１回だった。日付とともに内容を見ていくと、導入授業では「like にはいろいろな例文があることが分かった。これからたくさん使っていきたいと思った。」と、辞書を読んだ感想が書いてある。それが次の日の２回目の辞書引き学習では「１つの単語から、多くの単語があると分かった。例えば every から every day や everything など」と、英単語の組み立てに注目していることが分かる。書き方の注意など学習初心者らしい記述は10月21日を最後になくなり、10月頃からは似た意味をもつ単語や、ある言葉に注目して調べた記述が増えてくる。これは興味をもった言葉に注目して辞書を読むだけでなく、その単語の周りの単語とその説明も読むことで英単語の成り立ちなどに気がつき始めたのではないかと考える。さらに１月と３月には社会や英語の教科書に関連する記述があり、この頃には英単語が自分の生活にとって身近なものになってきたと推測する。

表15　自由記述のまとまりごとの分類

分類	出現回数	具体的な記述（日付）
派生に関すること	５回	・１つの単語から、多くの単語があると分かった。例えば every から every day や everything など（6/1） ・国の名前の最初は大文字で、国の名前の後ろに１つ言葉がつくと～のという意味になると分かった（6/29） ・～する人の単語は必ず最後に er がついていると分かった（7/15） ・luck（運）から色々展開して単語ができていると分かった（1/18） ・difficult に y をつけると困難という意味になると分かった（2/21）
文法に関すること	10回	・動詞の do にはいろいろな役割があると分かってすごいと思った（6/14） ・動物など複数あるものに s をつけることが分かった。また don't など短縮が多いことが分かった（6/16） ・英語には never や no, not など否定形の単語が多いことが分かった（6/28） ・英語には主格と目的格と所有格があることが分かった（7/5） ・英語は動詞の後につける副詞が多いことが分かった（7/7） ・be 動詞の are には You だけでなくいろいろなところにつけると分かった（9/28） ・英語の単語には疑問詞（what や who など）がとても多くあることが分かった（10/15） ・it's の短縮は it is だけでなくて it has の短縮形でもあると分かった（12/2） ・where's は where is だけでなくて where has の短縮でもあると分かった（2/14） ・死んだは死ぬの過去形で die に d をつけるだけだと思っていたけれど dead に変わると分かって驚いた（2/24）
書き方の注意	３回	・バスケットボールや野球の単語は basketball と basket と ball の間を開けていなかったので気をつけたい（6/30） ・ハワイは i が１つだけでなくて i が２つつくことが分かった（11/1） ・classroom(教室)は class と room の間にすきまをあけないことが分かった(10/21)

発音に関すること	1回	・hundred と hand は同じ発音でも u と a で文字が違うと分かった（11/4）
似た意味をもつ単語	7回	・eat と have は同じ意味だと分かった（7/7） ・trip と travel の違いはなんですか（7/20） ・注意して聞くと自然に聞こえる、は違う単語だと分かった（9/13） ・tell と show と teach は同じ教えると読むことが分かった（意味は違う）（10/12） ・今まで「誰か」は who だけだと思っていたけれども今日 someone も「誰か」という意味があって２つあることが分かった（12/22） ・上の言い方には on や Above all の他に over があると分かって、いろいろな言い方があるとんだなーと思った（2/26） ・house と home の違いが分かった（house は家で home はくつろげる場所という意味だった）（3/2）
他教科との関連	2回	・日本語と同じように早いと速いでそれぞれ意味が違うと分かった（9/21） ・社会で出てきた単語がたくさんあった（1/18）
１つの単語のいろいろな意味	1回	・kind には意味が「やさしい」だけでなく「種類」という意味もあって驚いた（9/30）
ある言葉に注目	6回	・それぞれの月の英語を調べた（7/8） ・曜日について調べた。曜日は語尾にすべてだ day がついていることが分かった（7/12） ・clown はピエロ、crown は王冠という意味で 1 文字違うだけで意味が全然違うと思った（10/27） ・junior は年下で junior high school は中学校でそれぞれの単語に意味があることが分かった（12/20） ・under や water がつく言葉がたくさんあった（1/13） ・post がつく単語が多くあることが分かった。（post →地位、post office →郵便局など）
教科書との関連	1回	・教科書に出てきた単語があった（riverbank）（3/7）

さらに年度末のインタビュー（表16）を見ていくと、これが７月の１回目のアンケートで否定的な回答をした生徒の回答だろうかと驚く。８ヶ月間の取り組みで何がこの生徒をここまで変化させたかインタビューを分析すると、キーワードは「単語量」、「自信」、「テストや普段の学習に生かせる」、「目で見える」である。伝えたいことを伝えたり、書いてあることを理解するためには相当の量の英単語を知っている必要があるが、自分がどれだけの量の英単語を知っているかはなかなか目で見ることができない。しかし辞書に貼られた付箋を見れば、それが一目瞭然である。またその辞書を見ることで、自分がここまで学習を積み重ねてきたという自信も生まれる。そしてその学習方法も何度も書いたり読んだりではなく、その日偶然出会った単語や自分が興味をもった単語の周りを読んでいく。この辞書引き学習には多くの「楽しさ」が

隠されている。付箋を貼る、貼った付箋が増えていく楽しさはもちろん、自分が思っているよりもたくさんの言葉を知っていることに気づいていく楽しさ、また言葉との偶然の出会いや知っている言葉からさらに言葉が広がっていく楽しさである。この「楽しさ」を感じることで、生徒は辞書引き学習に惹きつけられ、それが英語学習そのものへの意欲に繋がっていく。当然のことながら今回の生徒は、５月31日から学年末までとある程度の時間をかけて取り組んできた結果なので、ある程度の時間を費やさないと効果は現れない可能性がある。

このことは、辞書引き学習に取り組むすべての生徒に対してのヒントになっていると考える。つまり、１人でも多くの生徒にこの生徒と似たような思いを抱かせることができたならば、英語への学習動機づけも英語力向上も同時に叶えることが可能になるということである。

表16　インタビューの文字起こし

質　問	回　答
辞書引き学習に取り組む前と後で、自分自身がどのように変わりましたか。	英語の教科書だけでなく、辞書からも知った単語があるので自分の知っている単語の量が増えました。
辞書引き学習をして見て自分自身の英語学習に関するモチベーションはどのように変化しましたか。	今まで英語に対する自信があまりなかったんですけど、辞書引きをしてから英語の自信が少しつくようになりました。
辞書引き学習をしてみてどのような学びがありましたか。	一番驚いたことは「～をする人」という時に、必ず最後に er がついていると分かったので、テストの時や普段の文を書く時もどの辞書引きから学んだことを生かして書いていきたいです。
辞書引き学習を自分自身引き続き取り組みたいと思いますか。	はい。なぜなら自分の知っている単語の量が目で見て分かって楽しいからです。

おわりに

これまで公立中学校での英語辞書引き学習実践について、実践の詳細を示し、アンケートや定期テスト、そして抽出生徒の JB 日記の分析を行ってきた。本章では、今後の課題や計画について述べ、締めくくりとしたい。

すでに述べてきたように、今回の授業実践では期待以上の効果を実感することができた。週に２時間の帯活動で辞書引き学習に取り組むことは、英語学習への動機づけと英語力の向上という中学校英語科の最大の課題への解決策の１つとなることが実証された。しかし当然のことながら課題も見つかった。それは意欲が持続しなかった生徒が出たことと、辞書そのものの取り扱いである。

まず意欲が持続しなかった生徒には２パターン見られた。１つ目は毎回同じパターンの繰り返しになるので、活動そのものに飽きてしまった生徒たちである。この生徒たちは割と早い段

階で飽きてしまったので、「楽しい」と感じるまで辞書引き学習を継続させることができなかった。これらの生徒も学習開始時には、付箋を貼ったり付箋が増えていく楽しさは感じていたようだが、付箋を貼った辞書を誰でも目にすることができる分、他の生徒と比べて意欲を失っていった生徒もいた。付箋の枚数が少なくても他の単語に出会う楽しさを感じたり、辞書引きを通して知った言葉がテストや授業で生きる実感をすることができた生徒は、枚数を気にすることなく意欲的に取り組んでいた。英語の授業だけでなく普段の学校生活でも言えることだが、付箋の量で気にするのは他人ではなく、自分の学習の成果であり進め方も自分のペースが大切だということを伝えていく必要がある。毎回同じパターンというのは飽きる生徒もいるが、安心感につながる生徒もいた。特に授業の進め方を理解している方が安心できる生徒には、毎回同じことを繰り返す方が好評だった。さらに週に 4 時間の帯活動で辞書引き学習とそれ以外の活動を交互に行ったので、授業の開始前から辞書引き学習に取り組む生徒もいた。まずは何かしらの楽しさを感じるまで継続されることが大切である。

２つ目は辞書に付箋が増えることで辞書が使いにくくなる、見づらくなるのでやめてしまう生徒だった。これは辞書そのものの取り扱いにも関わってくるのだが、辞書に付箋が増えて辞書が広がったり、見づらくなっていくのを喜ぶ生徒がいる一方でそれを嫌がる生徒も出てしまった。付箋をノートに貼ることも提案したが、それはそれで受け入れられず、辞書を読む活動はしていたが、付箋を貼ることはやめてしまった。今回は提供してもらった辞書だったので、「自分の辞書ではないから付箋を貼るけど、自分の辞書は綺麗にしておきたいから貼らない」という生徒もいた。近年の生徒たちは、辞書に限らず学習道具を使い込んだものにするより、綺麗なまま使いたいという生徒が多い。そのような生徒には初めから「辞書引き専用ノート」などを準備させ、そこに付箋を貼っていくなど工夫が必要かもしれない。辞書そのものについても同様である。個人の辞書を使用させる場合、購入してもらうのか、iPad に入っている辞書アプリを使うのか、学校図書館から借りるのかなど多くの選択肢を準備する必要がある。個別最適化が言われているが、辞書引き学習も生徒一人一人が安心して取り組めるように、取り組み方の個別最適化が必要だと感じる。

今後は今回の実践で得られた成果を生徒や保護者に伝えて、さらに取り組み方も一人一人に応じた取り組み方を実践してみたい。まず、辞書引き学習に取り組む前に毎時間の進め方だけでなく、取り組むことでどのような力がつくのか、学習には何が必要かを説明する。そしてどのようにして取り組んでいくか多数の選択肢を与えてそこから自己選択させることで、最後まで全員が辞書引き学習に取り組むことができ、学習意欲と英語力がどのように変化するか検証すべく実践を継続していきたい。

註

※すべての URL の最終確認日は、2023年３月３日である。

[1] 文部科学省 令和３年度「英語教育実施状況調査」の結果について
https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1415043_00001.htm

[2] 荻野友範、吉川龍生、深谷圭助「高等学校の中国語授業における辞書引き学習導入実践：紙の辞書とオンラインツール活用の試み」（慶應義塾大学外国語教育研究 18号 p43）

[3] 深谷圭助「子供と言葉の出会いに関する国際比較研究―イギリスと日本における「辞書引き学習」の導入事例を中心に―」（中部大学現代教育学部紀要第10号、2018）

[4] 本研究は、2021年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）（基盤研究（B））「複言語学習における汎用的な言語間共通学習方略モデルの開発に関する国際比較研究」（代表・深谷圭助／課題番号：20H01294）

[5] 新潟市では文部科学省の GIGA スクール構想を受け、2021年度に小学校１年から中学校３年まで一人１台の学習者用端末を整備し、授業支援アプリケーションとしてロイロノート（https://n.loilo.tv/ja/）を導入している。

[6] mentimeter（https://www.mentimeter.com/）とはリアルタイムに参加者の意見を画面に反映できるサービスである。生徒は教員が作成したおいた QR コードを iPad で読み込んでクイズに参加する。クイズは毎回５問出題し、正解か不正解か、そして回答の速さで順位が変化していくので生徒からの人気は高い。